
働くことの 意味とは

広島大学大学院教授

町田宗鳳

まちだ そうほう

「働け！」と言った武田鉄矢の母のように

「働くことの意味」を考えようとするとき、まず私の頭に浮かんでくるのは、武田鉄矢さんの「母に捧げるバラード」というヒット曲です。なぜかといえば、その中に次のような語りがあるからです。

行つてこい 何処へでも行つてきなさい

母ちゃんあんたの事は息子がおらんことになつても何も淋しゆうなかよ

鉄矢 ひとつだけ言うとかがなあ 人様の世に出たら

働け 働け 働け 鉄矢 働いて働いて働き抜いて 休みたいとか遊びたいとかそんなこと

いっぺんでも思うてみる そんな時はそんな時は 死ね

それが人間ぞそれが男ぞ

お前も故郷を捨てて 花の都へ出てゆく限りは 負けたらつまらん

誰にも負けたらつまらん

輝く日本の星となって帰ってこい

行ってこいあんだ何処へでも行ってきなさい

母ちゃん何も淋しゅうなかよ

(武田鉄矢作詞／JASRAC 出07162371701)

これは武田さんのお母さんが、これから郷里を離れようとする息子に言つて聞かせる、はなむけの言葉です。武田さんはこの曲をとてモリスに歌うのですが、ここには真の意味で、教育的な母の姿が描かれています。

日本中のお母さまたちが、自分の息子や娘に向かって、「ひとつだけ言うとかがなあ、人様の世に出たら、働け、働け、働いて働いて働いて、休みたいとか遊びたいとか、そんなこといっぺんでも思うてみる、そんな時はそんな時は、死ぬ、それが人間ぞ」と言い切れるぐらい腹が坐っていたら、文部科学省なんて、まったくの無用の長物になって、この国はいっぺんによくなります。

あまりにも多くのお母さんたちが、「頑張つて勉強しなさい」と言いながら、早くから子どもたちを塾やら進学校に送り出すから、すべてがおかしくなつてしまふのです。いちばん苦しんでいるのは、本来は遊び盛りの子どもたちですが、そんな世間の価値観に迎合した親の発想が、子どもの人生も、世の中全体の歯車も狂わせてしまふのです。

勉強が好きなき子は、放つておいても勉強をします。勉強が嫌いな子は、「勉強しなさい」と言われれば、もつと嫌いになります。勉強が嫌いな子には、「さっさと卒業してしまつて、あとは自分がほ

んとうに好きな道を見つけて、一生懸命に働きなさい」と言っておけばいいのです。

一昔前の親と異なつて、物わかりのよい現代の親は子どもを好きなように放任して、自由を与えているようにも見えますが、じつは子どもを少しも解放できていないのです。なぜなら、子どもを自身が囚われている世間的常識という狭い鳥かごの中に、知らず知らずのうちに閉じ込めてしまつてゐるからです。

島田洋七さんの「がばいばあちゃん」も、英語のテストで零点をとつてくる彼に、「日本人に英語があるか」と一笑に付します。代わりに、家事を手伝つたり、陸上競技に励んだりする孫を心から愛し、応援します。だから、実親から離れて暮らす島田少年も、スクスクと育つて、一流の芸人として花咲かせることになつたのです。「がばいばあちゃん」が目を見ていた人間の値打ちは、ぜんぜん世間体とは関係のないところにありました。

現代社会では、モダンなオフィスで机に向かつてゐるホワイトカラーの知的労働ばかりが、高く評価されているような面があります。そのほうが収入もいいし、カッコもいいという思い込みがあるものですから、大学を出てホワイトカラーになるのが当然みたいな期待を、無意識のうちに子どもに押しつけてしまふのです。

だから、東京都心にある高層ビルの本社に、高級スーツを着て通うのが夢です、というような若者ばかりが続出してしまふのです。そんな上昇志向の若者がどれだけ増えても、日本はよくなりません。せつかくの若い才能が大都市に集中してしまふのは、もつたない話です。

私はホワイトカラー人口が半減しても問題ないし、そのほうが日本という国にとつても、働く当人にとつても、幸せなことだと思つてゐます。なぜなら証券会社がつぐらいつぶれても、その関係者

以外は誰も困りませんが、お米を作ってくれるお百姓さん、魚を獲ってきてくれる漁師さん、壊れな
い家を建ててくれる大工さんがいなかったら、日本国民全員の生活はたちどころに行き詰まっ
てしま
うからです。

日本が経済大国になれたのも、製造現場のブルーカラーが高い技術力を維持してくれていたからで
す。企業の経営陣が、外国のビジネススクールで学んできたようなエリートばかりで固められてい
ても、有能なブルーカラーが汗をかき、手を汚して、働いてくれなかったら、どうしようもないので
す。ですから、背広なんか着ることがなくても、汗まみれになって働いてくれるブルーカラーのほう
が、はるかに「偉い」のです。

なのに、子どもたちに人間として成功するということは、ホワイトカラーの管理職に就くことだ、
というような先入観を植え付けてはいませんか。とんでもないことです。

最近、日本中の生産ラインで外国人労働者が急増しています。安い人件費や少子化問題も原因して
いますが、なにより日本の若者が多大な労力を要求される現場の仕事を敬遠しはじめたからです。代
わりに、なすこともなく朝早くからパチンコ屋さんの前で長蛇の列をなす若者が増えました。日本
でもっとも哀れな光景です。そこに亡国の危機を感じます。

ですから、子どもたちには「働いて働いて働き抜いて、休みたいとか遊びたいとか、そんなこと
いっぺんでも思うてみる、そんな時はそんな時は、死ぬー」とまでは言わなくても、せめて「給料の多い少
ないにかかわらず、汗水たらして、正直に元気いっぱい働くことこそ、人間としてなによりも立派な
ことなんだよ」と、物心ついたときから教え込まなくてはならないのです。

神々しい労働の姿

私の近著に、『愚者の知恵——「イワンの馬鹿」に学ぶ』（講談社＋α新書、一月二〇日発行）という本があります。それは、『イワンの馬鹿』などトルストイが創作した何篇かの民話を綴ったものですが、その中で『二老人』という短いけれども、とても含蓄のある物語を取り上げています。

話はこうです。村人から人格者として尊敬されているエフィームと、あまり風采があがらないけれど、みんなから愛されているエリセイという二人の爺さんが、何年も前から約束していたエルサレム巡礼を実行に移すことになります。しかしそれは、往復で一年もかかる長途の旅ですから、お金の工面やら、仕事の段取りやら、たいへんだったのです。

いろいろと苦労した挙句に、エフィームは無事エルサレムにたどり着きます。そこでイエス・キリストゆかりの聖地を巡礼するのですが、自分が留守をしている間の家族のことや仕事のことや心配でならず、少しも敬虔な気持ちになれません。

そんなとき、途中ではぐれてしまったはずのエリセイが、巡礼者で埋め尽くされている教会の祭壇の前で、全身を光り輝かせながらお祈りしている姿を何度も目撃してしまうのです。あり得ないことですが、それは確かに起きていることでした。

当のエリセイ爺さんは、エフィームと別れて、水を飲み立ち寄った村で、たまたま餓死寸前の農民家族に出会い、そこに留まってしまっていたのです。人のよい彼は、懸命になって農民一家の再起を応援するうちに、せっかく苦労して集めた巡礼用のお金も使い果たしてしまい、エルサレムに行け

なくなりました。

深く聖地巡礼を諦めたエリセイは、エフィームとはぐれたまま、一人で故郷に戻り、以前のよう
に家族とともに、せつせと働き始めます。長年の夢だったエルサレム巡礼を途中で止めてしまった理
由を誰にも話すことなく、「何事も神様のおぼし召し」と考えている彼は、いつもニコニコとして、
幸せそうでした。

もともと彼は大工さんだったので、年をとってからは息子に何もかも任せ、毎日、蜂の世話を
していました。そこへエルサレムから戻ってきたエフィームが訪れて来るのですが、彼が目にした光
景は、こうです。

「養蜂所へは行って、見ると、エリセイが網もかぶらず手袋もつけず、灰色の長外套を着て白樺
の樹の下に立っており、両手をひろげて上をながめ、そのはげ頭が一面に光り輝いているようすは、
ちようどエルサレムで、主の御墓の前に立っていたときとそっくりです。それに彼の頭の上には、
やはりエルサレムのように、白樺の葉をすかして太陽がきらきら光っていました。そしてまた頭
のまわりには、金色の蜂が環になってつながりながら飛び舞っているのですが、刺そうともしませ
ん。」

(北御門二郎訳)

あまりにも美しい光景です。労働する姿にこそ、神が宿るといふ気がします。エリセイは、どれだ
け凡庸なことをしていても、それを無心になつて楽しむすべを知っていたのです。

要するに教育とは、こういう働く美しさを若者に教えることではないでしょうか。大学や大学院へ

の進学率を高めることが、教育の向上でもなんでもなく、まさにこういう労働の喜びを知る若者を一人でも多く社会に送り出すことが、教育革命だと思います。

私の土囊ハウス・プロジェクト

エリセイ爺さんのように心ウキウキと働いた記憶はあまりないのですが、私も青春時代の二〇年間を肉体労働だけで過ごしました。禅寺の小僧さんだったからです。

中学や高校にお寺から通わせてもらっていたのですが、朝五時に起きて学校に行くまで、広い広い庭の掃除をしなければなりません。いつも素手素足なので、冬になると、私の手も足も霜焼けで腫れ上がっていました。掃除が終わると走って学校に行きましたが、いつも遅刻寸前でした。同じ遅刻でも、ゆっくりと寝坊して、親に起こしてもらってから登校してくる友だちのことが羨ましく思えました。

学校の終業ベルがなると、今度もお寺に走って帰りました。放課後のクラブ活動やら友だちとの遊びなんかは論外で、炊事と風呂用のまき割り、畑での野良仕事が待っていました。私は生来、不器用なので、ナタで自分の手を切ったり、畑で肥やしの桶をひっくり返したり、ドジなことばかりしていました。

なにしろお寺では肉体労働ばかりしていたので、学校に行くとき疲れすぎて、ほぼ完全に居眠りしていました。今でも中学校時代の数学の先生とお付き合いがありますが、その先生は私が授業中に寝ていた記憶しかないと言います。それほど、私は体を張って働いていました。私はもともと、頑健で

はなかったのですが、高校を卒業するころまでには、押しも押されもしない肉体派青年となっていました。

途上国では当たり前のことですが、現代日本では私ほど思春期を明けても暮れても肉体労働で過ごした人間は、きっと珍しいと思います。そのおかげで、私は少し変な学者になってしまったようですが、あの労働体験は間違いなく私なりの人間形成の過程において、大きな役割を果たしたと思います。もちろん、知識を手に入れることも大切ですが、肉体を使って働いたことのない人間は、どうしても頭でっかちになりがちです。ですから、知的教育を推進することと同時に進行で、若い人にはなるべく早いうちから、汗をかいて黙々と働く喜びを教えていかななくてはならないのです。

というよりも肉体を使って働くことの喜びを教えることこそ、知的教育の水準向上につながると思います。なぜなら「健全な肉体に健全な魂が宿る」と言われるように、労働によつて肉体を鍛えようと魂が健全になり、魂が健全になると、思索が深まるからです。

そう考えると、学校の掃除を業者に任せるなんて、もつてのほかです。自分たちの学び舎を嫌がらずに、嬉々として掃除するような若者を育てることが教育の根幹ではないでしょうか。そのへんに校長以下、全教員に「働くことの意味」について深い認識が求められます。

そのように肉体系主義者を自認するわたしが、教育目的で最近始めたことがあります。それは土囊ハウス・プロジェクトです。洪水のときなどに自衛隊が積み上げる土囊を使って家を作るのです。ひとつの家を作るのに一〇トン以上の土と、土囊袋が何百個かいらいますが、それに土を詰めるのも、それを積み上げるのも、手作業です。

円形に積み上げていくと、モンゴルのゲルのような形になりますが、耐震構造は抜群で、震度八ま

では大丈夫だそうです。すでに広島市郊外の白木町に広島大学の大学院生や学部生たちと一緒に、一基作りました。地元の農家の人たちや一般のボランティアとも力を合わせて作ることによって、ふだん一緒に働くことのない人々との交流にもなりました。

いずれは親子の絆を強めるために、小さな子どもたちには親子で参加してもらおう計画です。落ち込んでいる若者にも声をかけて、重い土嚢をかつがせ、汗をかいてもらいます。おしゃれをすることはばかり考えている女の子も、泥まみれになって働かせます。モノを作ることの喜びを体で感じてもらうためです。

完成した土嚢ハウスは、キャンプ、作業場、音楽会、瞑想などに利用できます。美しい自然環境の中で作れば、そこで働くだけで心が癒されます。わたしは日本のあちこちで、この土嚢ハウスを作り、心も体も元気な若者を増やすのが夢です。

究極的には、労働は遊びであるべきです。そのことを子どもの中に、しっかりと刷り込んでおけば、大人になっても、自分の職業を楽しむ道を見つけ出すでしょう。マジメくさって働くから、健康を害したり、自分は出世が遅いと焦ったりするのです。

そもそも日本中の職場の雰囲気は沈み過ぎています。狭い職場に多くの人間が机をつき合わせて、一日中、坐っているくせに、互いに「我関せず」といった感じで、来客や電話の応対以外は、ひたすら沈黙を守っています。何十人という人間が働いているのに、シーンとしていたりする光景は、まことに「キモイ」ものです。

もつと職場の者同士が冗談を言ったり、上司や家族のことを話したり、ワイワイガヤガヤしていて、いいのではないのでしょうか。一緒にお菓子を食べたり、お茶を飲んだりする時間も、もつとあってい

いはずです。

業務内容そのものには、真剣に取り組まなくてはいけないことは言うまでもありませんが、楽しく開放的な職場の雰囲気作りをしたほうが、結果的にいい仕事ができるように思えてなりません。

労働といえば、能率とか賃金とかに直結させるのは、経済観念に脳みそを冒されてしまった近代人特有の思想の貧困です。働くことの喜びを知る真の意味での「遊び人」を、日本中の職場にはびこらせることが、経済大国・日本の次なるチャレンジではないでしょうか。

〔参考文献〕

- (1) 島田洋七「佐賀のがばいばあちゃん」徳間文庫、二〇〇四
- (2) トルストイ著、北御門二郎訳「老人」あすなろ書房、二〇〇六